マイスター派遣公開授業

第４学年　国語科学習指導案

平成２７年１１月２６日（木）第５校時
授業者　教諭　伊藤　隆之
（新潟市立亀田東小学校）

【授業の見どころ】
本時は俳句の情景を想像する授業である。
俳句は，五七五の限られた文字数で情景を表している。また主語，述語などの文の形にはなっていない。そのため児童にとって情景を想像することが難しいものがある。しかし，教師が情景を解説するだけでは，限られた文字数で読者に情景を豊かに想像させる俳句のよさやおもしろさに気付くことができない。そこで本時は次のように児童に働き掛ける。

(1)四季を代表し，かつ，視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚で四季を感じていることが分かる俳句を提示する。
(2)五感カードを用い，俳句の作者が，季節を体のどこで感じているかを手掛かりに，俳句の情景を想像させる。また想像したことを交流する場面を設定する。

これらの働き掛けにより，児童は俳句の言葉に着目しながら情景をより豊かに想像できるようになるだろう。また限られた文字数で読者に情景を豊かに想像させる俳句の表現のよさやおもしろさに気付くことができるようになるだろう。

１　単元名　俳句に親しもう

２　単元の目標
○俳句を声に出して読んで，言葉の響きやリズムを感じ取るとともに，情景を思い浮かべる。(「伝統的な言語文化と国語に関する事項」)

３　単元の評価規準
「関心・意欲・態度」
○「四季のしおり」づくりを通して，俳句のもつ，言葉の響き，リズムに親しもうとしている。
「伝統的な言語文化と国語に関する事項」
◎言葉の響きや五音，七音のリズムを感じ取りながら音読し，情景を思い浮かべている。
「読むこと」
○俳句が表す情景を，想像豊かに思い浮かべている。
「書くこと」
○「四季のしおり」に選んだ俳句について，気に入った理由を書くことができる。

４　児童と単元について
(1)児童の実態
飛び込みの授業となるため，児童の実態は現段階では分からない。そのため，どのような実態であっても，児童が取り組みやすい工夫をすることが求められる。
そこで次のような実態を想定し，対応できるように試みる。
①音読の実態の想定と対応
一斉読みのようにみんなで声を合わせ音読する活動では意欲的な姿が見られる一方，一文交代のようにリレー読みになると，すらすら読めなかったり，自信がなく小さいに声になってしまう児童がいると想定する。また，すらすら読める児童，叙述から想像したことを音読で表現できる児童とそうでない児童がいると想定する。「すらすら読めない」「自信がない」といった姿を改善できるよう，私は自学級では，これまで次の取組をしてきた。
(ｉ)視覚入力，聴覚入力の苦手さを補う音読の工夫
漢字の多い長文の場合は，読み聞かせ（範読）を単元冒頭に行うことで，目から文字情報を取り入れることが苦手な児童も学習に取り組みやすくする。また，ルビを振らせ練習しやすくする。ただし，短文や谷川俊太郎の「いるか」のように平仮名が多く切れ目を変えることで複数の解釈ができるような詩文の場合は，先に範読は行わず，いろいろな読み方を考えさせる授業を行ってきた。本時で扱う俳句は，リズムを感じとらせるねらいもあるため範読の必要のない読みの易し

い俳句を提示したい。

(ⅱ)表現の根拠となる叙述（言葉）への確実な着目

３年生「すいせんのラッパ」（東京書籍）では，「声の大きさ」「声の高さ」「読む速さ」に気を付けてて音読する学習を行った。これらのいわゆる「音読の技」を使いこなして音読できる児童もいればそうでない児童もいる。人前で声を出すことに苦手意識をもつ児童もいるが，どのように読んだらよいのか，その手掛かりが不明なために自信がなく読めない児童も見受けられた。そのため，一部の児童が活躍する授業になりがちであった。そこで「どのように読んだらよいか」を問うだけでなく「この文をどのように読んだらよいか分かる言葉を見つけよう」と全体で検討し確認することで読みの手掛かりを共有できるように働き掛けた。このように確実に全員が参加し,手掛かりをもって音読できる学習を試みてきた。

本単元では情景を想像して音読する活動を行う。全員の確実な参加のためにも，俳句のどの言葉から情景を想像できるか手掛かりとなる言葉に着目できるよう働き掛ける必要がある。

②言葉のもつ響きやリズムについての実態の想定と対応

低学年から中学年では，リズムのよい詩や言葉遊びの歌では，リズムにのって意欲的に音読する姿が見られる。今回，授業する学級も同様の実態ではないかと想定している。しかし，リズムのよさがなぜ生まれているのかまでは自覚していないだろうと想定している。

３年生の詩教材「木の葉」（西村祐見子）は，「春から　夏まで　編みました」のように八・五（四・四・五ともいえる）の調子で書かれた詩である。自学級における，この詩の学習では，児童はリズムにのって音読しているものの，リズムを自覚的に読んでいたわけではなかった。しかし「もうふに　かけてあげました」の表現に違和感をもつ児童が多く見られた。そこで「もうふにして　かけてあげました」と「もうふに　かけてあげました」の二つに表現を声に出して読み比べることで，原詩の方がリズムがよいことに気が付いた。「なんだか五七五みたい」という発言もあり，リズムのよい秘密は字数（音数）を整えて書かれていることに気が付くことができた。自学級の児童も，俳句や川柳，短歌，カルタなどの遊びを通して五七調や言葉のもつリズムを，自覚的ではなく，なんとなくではあるが，体感的に感じとることはできているようである。本単元でもリズムのよさを感じ取ることができるように，声に出しながらリズムを確かめるような活動を展開したい。

③感想や読み取ったことを書く活動について

「読むこと」領域では，詩や物語の文学教材を読んだ後で感想や読み取ったことを記述する活動で際に，進んで書ける児童と，なかなか書くことのできない児童に分かれることを想定している。また書くこと自体に苦手意識をもっている児童も見られることも想定している。このような実態への対応としては，私は国語の「書くこと」以外の領域であっても，また他教科であっても日常的に自分の考えを書き表すことができるようノート指導を継続してきた。本単元においても，気に入った俳句を視写したり，気に入った理由を記述するといったような書く活動を大切に展開したい。

(2)単元について

①学習指導要領との関連

本単元に関わって学習指導要領に示されている事項は，次の通りである。

［伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項］
ア　伝統的な言語文化に関する事項
（ア）易しい文語調の短歌や俳句について，情景を思い浮かべたり，リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。
C　読むこと（１）
ア　内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。
ウ　場面の移り変わりに注意しながら，登場人物の性格や気持ちの変化，情景などについて，叙述を基に想像して読むこと。

②本単元の価値

俳句という日本の伝統文化の素晴らしさを知り，親しみ，またそれを次の世代へとつなげていけることを願い本単元を設定する。

俳句を学習する価値を，授業者として次のようにとらえている。

（ⅰ）日本人の四季に対する感覚，言葉の豊かさを知ることができる。
（ⅱ）五・七・五を構成する言葉の響き，それらが生み出すリズムを声に出して読む

心地よさやを味わうことができる。
（ⅲ）限られた字数（音数），定型の中でも，読み手に情景を豊かに想像させる俳句のよさやおもしろさに触れることができる。

上記の価値を単元の中に具体的な指導事項として位置付けていくことで，俳句という伝統的な言語文化により親しめるようになると考えている。

5　指導の構想

(1)単元を貫く言語活動について

「季語」「言葉の響きと五・七・五のリズム」「情景」の三つを指導事項とする。これらの指導事項を指導するため単元を貫く言語活動として，「四季のしおり」づくりを設定する。「四季のしおり」づくりで，気に入った俳句を選び視写し，情景を簡単な絵で表す活動を行う。次の２点の理由から「四季のしおり」づくりを設定した。

①児童にとって取り組みやすい活動であること。

中学年児童は，生活科での学習を基礎に，理科で植物や天体（太陽や月）の学習などを通して，自然に触れ，季節の変化を大切に学習している。自学級においても，国語，理科，図工，学級活動等で季節感を大切にした指導を行ってきた。理科のように直接の学習内容のほかにも，トピック的に図工で「春といったら思い浮かぶもの」というようなテーマで「季節の絵手紙」を描くような活動を行ってきた。このような経験をしているので「四季のしおり」づくりは，児童にとって取り組みやすいものであると考えている。

②日常的に俳句に親しむことができる活動であること。

しおりには，自分の気に入った俳句を視写する。またこれまでの絵手紙の経験も生かしまた情景を想像して絵にしたりすることで，気に入った俳句をただ声に出して読むだけの活動よりもより俳句に親しむことができる。しおりを活用することで，日常的に俳句に触れ，親しむことができる。

しおりには，自分の気に入った理由も書くようにする。児童はしおりづくりの際，三つの指導事項である「季語」「言葉の響きと五・七・五のリズム」「情景」を観点として気に入った俳句を選ぶであろう。気に入った理由を書くことで，俳句のよさやおもしろさへの気付きを自覚したり，友達に伝えたりすることができると考えている。

(2)指導の構想

第１次では，「季語」を指導事項として扱い，季語の豊かさに気付かせるとともに単元の見通しをもたせる。

まず，自分たちが季節から感じたことを絵手紙にした活動を振り返らせ，俳句を提示する。次に，自分たちの絵手紙と俳句を比べさせることで，ともに季節について感じたことを表現しているが，同じ季節を表していても選んでいる言葉の違い（季語）や，リズムのちがうことなどに着目させる。その上で，俳句には季語を用いること，五・七・五のリズムで書くことなどの決まりごとがあること知らせる。そして季語となりそうな言葉を集め，さらに歳時記を紹介することで，季語が豊かにあることに気付かせる。ここで，「これまでは季節について感じたことを絵手紙にしてきたけど，今度は，季節を豊かに表現している俳句で自分の気に入ったものをしおりにしよう」と活動のゴールを示し，児童に単元の見通しをもたせる。

第２次は，２時間扱いとする。１時間目で「情景」，２時間目に「言葉の響きと五・七・五のリズム」を扱い，限られた文字数（音数）で読み手に情景を想像させる俳句のよさやおもしろさに気付かせることをねらう。「情景」を扱う１時間目では，五感カードを用いることで，俳句の言葉に着目し，俳句の情景を想像する。「言葉の響きと五・七・五のリズム」を味わう２時間目では，１時間目で想像した豊かな情景がわずか１７文字（１７音）で表現されていることに気付かせる。例えば正岡子規の「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」ならば河東碧梧桐の「柿食ふて居れば鐘なる法隆寺」の代案を声に出して読み比べることで，「鳴るなり」の響きのよさやリズムのよさに気付くようにさせる。このような活動により，児童は俳句の言葉から情景をより豊かに想像できるようになり，また限られた文字数で読者に情景を豊かに想像させる俳句の表現のよさやおもしろさに気付くことができるようになるだろう。このようにして「情景」と「言葉の響きと五・七・五のリズム」を俳句を選ぶ際の観点として獲得させることで第３次で行う「四季のしおり」づくりでは，「なんとなく気に入ったから」ではなく，「この言葉から美しい情景が想像できるから」「声に出して読んでみたら言葉の響きがおもしろかった」と言葉に着目して俳句に親しむ姿が期待できる。

第３次では，より多くの俳句に触れ，親しむことをねらい，「四季のしおり」づくりを行う。季語の豊かさや，情景，言葉の響きとリズムのよさに気付いた児童は，これら

を観点として気に入った俳句を選ぶであろう。そして「四季のしおり」をつくることで，より俳句に親しめるようになるだろう。２時間扱いとし，教科書にある俳句や図書館の本にある俳句など，多くの俳句に触れることができるようにする。しおりの表面には，気に入った俳句を視写させる。しおりの裏面には，なぜこの俳句が気に入ったか理由を書かせるようにする。

※　本公開授業は実際には１時間の飛び込み授業である，上記のような考えで単元を構成したものの中から，「６　単元の指導計画」の第２時にあたる部分を飛び込み授業用に修正して公開する。

6　単元の指導計画（全５時間）

時	学習のねらい	・主な学習活動	評価の観点					
			関	話	書	読	言	具体的内容
1	学習の見通しをもつとともに，俳句の決まりごとや季語の豊さを知る。	・俳句の決まりごとを知る。 ・季語を集める。	○				◎	俳句の決まりごとと，季語の豊かさを知る。
2 本時 ・ 3	俳句の情景を思い浮かべながら音読することができる。	・俳句の読み手が季節をどのように感じ，何に感動したのかを想像する。 ・気に入った俳句の情景を思い浮かべて音読する。	○			○	◎	俳句の言葉をもとに情景を想像している。（第２時：本時） 俳句の情景やリズムを感じ取りながら声に出して読んでいる。（第３時）
4 ・ 5	季節ごとに気に入った俳句を選び，「四季のしおり」をつくることができる。	・気に入った俳句を選び「四季のしおり」をつくる。	○		○	○	◎	俳句の読み手の感動や情景を想像しながら四季のしおりをつくっている。

7　本時の学習（指導全５時間，本時２時間目）

(1)本時のねらい

五感カードを用いて俳句のどの言葉がどのように季節を感じさせるかを考えることを通して俳句の情景を想像することができる。

(2)本時の構想

本時は，３つの指導事項の中の「情景」を扱う。「この俳句からどんな様子が思い浮かびますか」と問うだけでは，児童は考える手がかりが足りず情景を想像することが難しい。また限られた文字数で読者に情景を豊かに想像させる俳句のよさやおもしろさに気付くことができない。そこで，児童が俳句の言葉に着目して考え，情景を想像できるよう次のように働きかける。

①四季を代表する俳句かつ，視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚で四季を感じていることが分かる俳句を提示する

四季の俳句を代表するものとして，児童にとって易しい句であること，そして五感を捉えやすいものを考え，次の２つを選定して提示する。

「春」「菜の花や月は東に日は西に」（視覚，嗅覚，触覚）
「秋」「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」（視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚）

春の俳句として，「菜の花や月は東に日は西に」を選定したのは，作者である与謝蕪村の句が叙景句であり，視覚的に訴えるイメージが強いことに加え，月と夕日の天体の間に菜の花畑が広がっていることをわずかな言葉で表現していることを伝えるのに適していると考えたからである。

秋の俳句として，「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」を選定したのは，五感全てで季節を感じさせる句だからである。

自学級であれば，春夏秋冬と四季全ての代表的な俳句を扱いたいものであるが，飛び込み授業の１時間で扱うことを考え，春の俳句で学習の仕方の趣旨説明と例示，秋の俳句で学習したことを活用するというように授業を進める。

②五感カードを用い，俳句の作者が，季節を体のどこで感じているかを手掛かりに，俳句の情景を情景を想像させる。また想像したことを交流させる。

俳句の情景を想像する際に，俳句の言葉に着目させたい。そこで五感カードを用

いた活動を行う。
　最初に「菜の花や月は東に日は西に」の俳句を用いて，全員で俳句の親しみ方を知る。「作者は，季節を五感のどこで感じたのか。」「目（視覚）なら，どんな様子が見えてくるだろう。」と問い掛けることで，俳句の言葉に着目し，そこから情景を想像させていく。
　次に，秋の俳句「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」で，個人で情景を想像する場面と想像した情景についてペアで交流するで行う場面を設定する。これにより各自の読みを深め，俳句に親しめるようにする。
　このような活動を通して，俳句の情景をより豊かに想像させる。また限られた文字数で読者に情景を豊かに想像させる俳句の表現のよさやおもしろさに気付くことができるようにする。

(3)本時の展開

学習活動	主な教師の働きかけと児童の反応	指導上の留意点と評価
1　学習課題を把握する。（５分）	T1　日本は四季の豊かな国です。季節の様子，季節から感じたことを俳句で表現してきました。これはある季節を代表する有名な俳句です。（「菜の花や月は東に日は西に」を提示する）どの季節か分かるかな。 C　春の俳句だ。 C　「菜の花」から春だと分かる。 T2　みなさんは「春だな」と感じるときはどんなときかな。 C　桜などの花が咲いたとき。（視覚） C　暖かくなってきたとき。（触覚） T3　目や肌などの体の感覚で季節を感じますね。この俳句でも体で季節を感じていることが分かります。 ＜学習課題＞ 俳句の様子を体の感覚で表してみよう。	・「菜の花や月は東に日は西に」の俳句を短冊にして黒板に提示する。
2　五感に訴える言葉を手掛かりに，全体での意見のやり取りを通して俳句の情景を想像する。（１５分）	C「菜の花」を見ているので目で感じている。 C　月や日も目で見て感じているよ。 C「菜の花」のにおいもあるだろうから，鼻でも感じているだろう。 C　日が沈むのでひんやりした感じもするかもしれない。 C 俳句は，作者が季節を目や耳，鼻，肌などで感じたことを表現しているんだな。 T4　菜の花はどれくらい咲いているのかな。 C　たくさん咲いているのじゃないかな。 C　ポツンと咲いているのじゃないかな。 T5　俳句の中にどれくらいの菜の花があるかが分かる言葉があるのだけれども見つけられるかな。 C　東と西かな・・・。 C　月と夕日の間に一面菜の花が咲いているのか。 T6　菜の花が東から西まで一面に咲いている様子。色や香り，肌で感じる気温や風なども想像することができますね。このような風景を見て，作者はどんなことを心で思ったのかな。また，みなさんだっ	・「体のどこで感じているか」が分かる言葉を全体で確認し，その言葉の横に「目」「耳」「鼻」「口」「手・肌」の五感カードを貼る。 ・五感カードを貼った言葉から想像を広げていく。T4,T5 は４年生には難しい問いであるが，わずかな言葉で情景を表現していることを確認するためのものである。難しい場合は，月と日の位置を図示し，二つの天体の間を一面に菜の花が咲いていることを表現していることを確認する。 ・まとめの部分は児童の発言を受けながら五感カードを用いて整理する。（心）のカードを用意し，作者の気持ちの想像や自分の感想を

	たらどんなことを感じるかな。 ＜まとめ＞ （目）一面の菜の花，月 ，夕日 （鼻）菜の花の香り （手や肌）気温，風 （心）（※　児童の感想）	一言でよいので書かせる。第３次の四季のしおりづくりにつながる活動である。
3　五感に訴える言葉を手掛かりに，個人作業で秋の俳句の情景を想像する。（１０分）	T7　秋の有名な俳句でも五感で感じる言葉を手掛かりに季節の様子を想像してみよう。 C　柿を食べているから舌（味覚）で感じている。 C　鐘が鳴っている音が聞こえるので耳でも感じている。	・「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」の俳句を短冊にして黒板に提示する
4　どのような情景を想像したかペアで交流する。（１０分）	T8　ペアでどのような情景を想像したかお互いに交流しましょう。交流が終わったら交流して気付いたことや感想をワークシートに書きましょう。 C　自分と同じ五感の言葉を見つけている。 C　柿をさわったり，もったりしていて手や肌でも感じていることが分かった。 C　友達は五感で感じる言葉を全て見つけていた。この俳句は五感全てで季節を感じているのかな。	・交流の仕方についてはまず，お互いに説明し合った後，「ここは自分と同じだね。」「ここは自分と違って，○○と思ったよ」などどいうように交流の仕方を具体的に例示する。 ・交流した気付きや感想をワークシートに記述する。
5　本時を振り返る。（５分）	T9　五感で感じる言葉を手掛かりに，俳句で表現された季節の様子を想像しました。学習してみてみなさんは俳句についてどんな感想をもちましたか。ワークシートに書きましょう。 C　目だけでなく，耳や鼻，舌，肌でも季節を想像させる俳句ってすごい。 C　これだけの言葉なのに，こんなに様子を思い浮かべることができるなんておもしろい。	評価（ワークシート） A　俳句の言葉から情景を想像するとともに，俳句のよさやおもしろさについての記述が見られる。 B　俳句の中から五感で感じる言葉を見つけ情景を想像している。

(4)本時の評価

ワークシートの記述から評価する。

①Ａの児童の姿

俳句の言葉から情景を想像するとともに，俳句のよさやおもしろさについての記述が見られる。

（記述例）「柿食えば」という言葉は味を感じさせるから舌でも季節を感じている。柿を食べていて，鐘の音が聞こえてくる様子が想像できる。目だけでなく，耳や舌肌など五感で季節を想像させる俳句ってすごい。

下線部＿＿＿のように情景を想像している記述と，波線部〰〰〰の俳句のよさやおもしろさについての記述が見られる。

②Ｂの児童の姿

下線部＿＿＿のような情景を想像している記述が見られるが，波線部〰〰〰のような俳句のよさやおもしろさについての記述が見られないもの。